

高齢者の社会参加と生きがいに関する研究

2. 高齢者の社会参加の現状と問題点

高間由美子・杉原利治*

I. はじめに

高齢者の社会参加と生きがいに関する一連の研究として、前報では「高齢者の社会参加の意義」について、基本的な考え方を述べた。そこでは社会全体として高齢化への対応を図るべく、高齢社会の現状と展開、あるいは高齢者自身の生活状況と実態を交えながら、高齢者の社会参加と生きがいについて論じた。

本報では、高齢者が社会参加をすることで、生きがいを持つことができる条件整備を行い、高齢者の『力』を活用すべく、社会貢献の可能な社会環境を整えることを目的とする研究を展開することとした。まず、高齢者の生きがいをどう捉えるか、図式化を試みた。高齢者の日常生活の環境や経験、考え方を基盤に社会参加や学習、趣味、モノづくりなどさまざまな活動が展開され、その活動を通して知

識や技術が習得されればその過程そのものが高齢者の生きがいづくりとなる。それが高齢者自身による自己表現から自己実現へと自立可能になる一歩でもある。更に若者との交流によって高齢者の『力』を活用できる可能性が生まれれば、それが自らの『力』を発揮する『場』にもなるだろうと考える。そうすれば、生きがいづくりから自身の生きがいへ導かれることになる(図1)。

この図式に従って、本研究は、高齢者の社会参加の現状と問題点を明らかにする。高齢者の生涯学習や社会参加に対する活動の実態を調査し、参加内容、その理由、あるいは、望ましい参加のあり方を探ることで社会参加の現状と今後の問題点を明らかにする。

このように、高齢者自身の生きがいにつながる社会貢献の可能な環境を整えることが、よりよい共生社会への実現にもつながると考

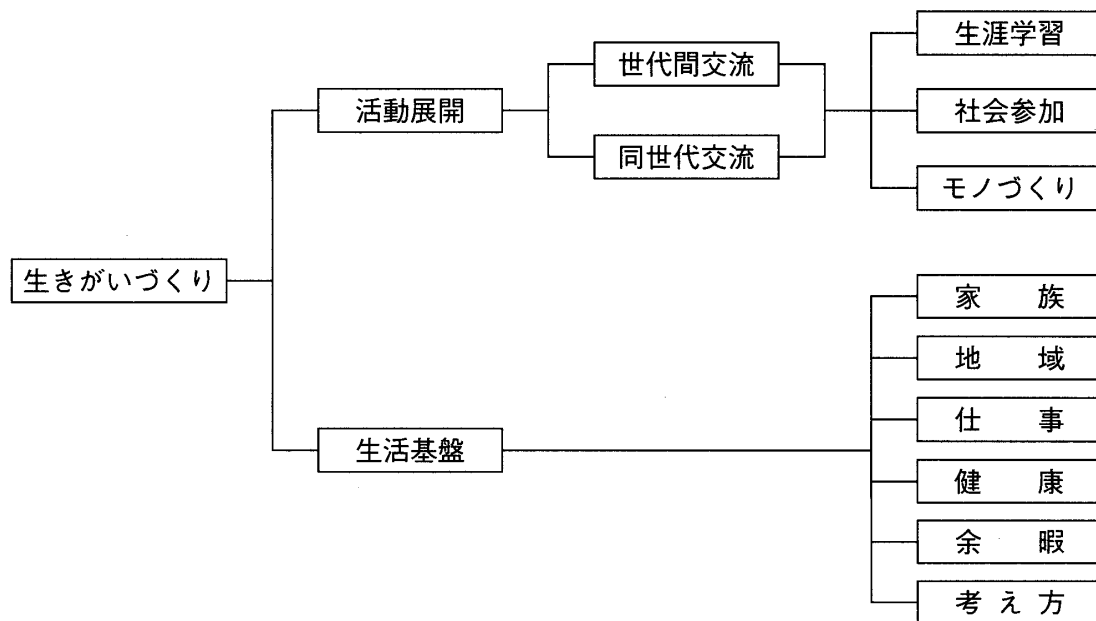


図1 生きがいづくりの図式化

* 岐阜大学教育学部

えるからである。

調査は1. 家族、地域、仕事、健康、余暇、考え方などの生活基盤 2. 趣味、特技を含む生涯学習 3. ボランティア活動等の社会参加 4. モノづくりへの活動など、4つの側面から、意識調査を行った。高齢者の生活基盤を軸にさまざまな活動への参加を促すことが生きがいへの第一歩であり、それが自己表現から自己実現へと可能になれば、更に共生社会へと望める。これらは、そのための調査内容である。そして、生きがいづくりへの方策を試みる契機ともなるだろう。

II. 方法

1. 調査方法

65歳以上の健康な高齢者を対象に、2001年10月から2002年1月にかけて、留置法による質問紙調査を実施した。634名からの回答のうち有効回答数613(男性262名、女性351名)が得られ、それをデータとして使用した。対象年齢比は65歳～69歳が270名、70歳～74歳が201名、75歳～79歳が88名、80歳～84歳が35名、85歳～89歳11名、90歳～94歳5名、95歳以上3名であった。

2. 調査内容

(1) 生活基盤についての設問項目

高齢者の生活基盤については、日常生活における現状や現在の関心事、あるいは健康への配慮・心がけなど、以下の14項目の質問を設定した。

「①年齢と性別」、「②同居家族は何人か」、「③住まいはどこか」、「④現在のところに住んで何年になるか」、「⑤近所づきあい」、「⑥近所づきあいをする理由」、「⑦近所づきあいをしない理由」、「⑧身体を動かす有無」、「⑨家(施設)で決まった仕事(手伝い)の有無」、「⑩家(施設)での仕事内容(手伝い)は何か」、「⑪健康のために毎日していること、心がけていること」、「⑫住んでいる地域への愛着はどの程度か」、「⑬参加している各種サークル・団体等の活動状況」、「⑭現在の関心事は何か」

である。

(2) 生涯学習についての設問項目

生涯学習については音楽、語学、歴史、盆栽、囲碁などの趣味・教養・学習的なものなど活動の参加の経験、参加内容、参加理由、今後の参加について質問を設定した。

「①趣味・教養・学習などの講座の参加の有無」、「②参加内容」、「③参加理由」、「④参加してよかったこと」、「⑤今後の参加内容について」、そして、参加経験のない高齢者には次の質問をした。「⑥参加しない理由」、「⑦今後の参加意志」である。

(3) 社会参加についての設問項目

資源リサイクル、社会福祉活動などのボランティア活動等の社会参加について活動の経験、活動内容、きっかけ、活動の継続、今後の参加活動について質問を設定した。

「①社会参加の活動の有無」、「②参加活動の感想」、「③参加活動の内容」、「④参加のきっかけ」、「⑤今後の参加活動の内容」、「⑥社会参加活動の継続期間」、そして参加経験のない人に対しては「⑦今後の参加が望める内容」、「⑧参加活動しない理由」、「⑨今後の社会参加の活動の意志」、「⑩社会参加活動するための条件」である。

(4) モノづくりについての設問項目

菓子作り、編物、陶芸などの手づくりについての関心の高さや内容、あるいは指導力について質問を設定した。

「①手づくりが好きか」、「②得意な手づくりの内容」、「③手づくりのよい理由」、「④得意なモノづくりを他の人に教えたいか」、「⑤教えたい対象者」、そして教えたくない高齢者に対しては「⑥教えたくない理由」、「⑦教えられる条件について」である。

3. 分析方法

調査各項目について、単純集計を行い、必要に応じてクロス集計(χ^2 検定)を行った。尚、結果については本報に必要と思われるデー

タのみを示した。

Ⅲ. 結果及び考察

(1) 生活基盤

生活を通して、「身体を動かすことが好きですか」との設問に対して「好き」の回答者は72.3%を占め、「どちらでもない」は24.1%にとどまった(表1)。「家庭での決まった仕事(手伝い)をするか」との設問に対して、「いつもする」は69.7%を占めた。男女比では女性が85.2%、男性が48.9%と男性より女性が高い比率を占めた(表2)。このことから高齢者の多く、特に女性は家庭生活の仕事に充分携わっていることがわかった。そして、元気で活動的であることが明らかとなった。

次に、生活の場でもある地域への愛着や近所づきあいについて試みる。「愛着がある」という高齢者は78.1%を占めていた(表3)。近所づきあいも「する」が54.8%、「一応は

する」が26.1%であり、全体の9割の高齢者が近所づきあいをしていて、地域への貢献度も高いと予測される(表4)。また、各種のサークルや団体への参加をみると、町内会・自治会、老人会(クラブ)、教養や学習のサークル、健康やスポーツのサークルの順に参加者が多かった(表5)。特に地域でのサークルに多くの参加者がみられたのは、地域への愛着があるからであろう。だからこそ参加のしやすさがあり、近所の人々とふれあう機会にもなっていると察せられる。

高齢者の現在の関心事は、健康管理、食事、旅行・レジャー、趣味的なこと、読書・新聞等の順であった(図2)。ここでも健康を意識し、健康管理、食事等健康への関心の強さが窺えた。さらに「旅行・レジャー」、「趣味的なこと」「読書・新聞等」と続いた。

以上のような生活環境から、高齢者は老いてもなお元気で、しかも生活向上を目指し、自ら前向きに取り組んでいるといえる。

表1 体を動かすこと

身体を動かす	男	女	総計
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
体を動かすことが好き	189(72.1)	254(72.4)	443(72.3)
どちらでもない	65(24.8)	83(23.6)	148(24.1)
嫌い	6(2.3)	8(2.3)	14(2.3)
無回答	2(0.8)	6(1.7)	8(1.3)
合計	262(100.0)	351(100.0)	613(100.0)

表2 家庭(施設)内の決まった仕事(手伝い)

決まった仕事	男	女	総計
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
決まった仕事をいつもする	128(48.9)	299(85.2)	427(69.7)
ときどきする	106(40.5)	33(9.4)	139(22.7)
何もしない	26(9.9)	14(4.0)	40(6.5)
無回答	2(0.8)	5(1.4)	7(1.1)
合計	262(100.0)	351(100.0)	613(100.0)

表3 地域への愛着

	男	女	総計
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
地域への愛着がある	208(79.4)	271(77.2)	479(78.1)
少しはある	43(16.4)	64(18.2)	107(17.5)
ほとんどない	7(2.7)	9(2.6)	16(2.6)
無回答	4(1.5)	7(2.0)	11(1.8)
合計	262(100.0)	351(100.0)	613(100.0)

表4 近所づきあいについて

	男	女	総計
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
近所づきあいをする	136(51.9)	200(57.0)	336(54.8)
一応はする	79(30.2)	81(23.1)	160(26.1)
あまりしていない	23(8.8)	30(8.5)	53(8.6)
無回答	24(9.2)	40(11.4)	64(10.4)
合計	262(100.0)	351(100.0)	613(100.0)

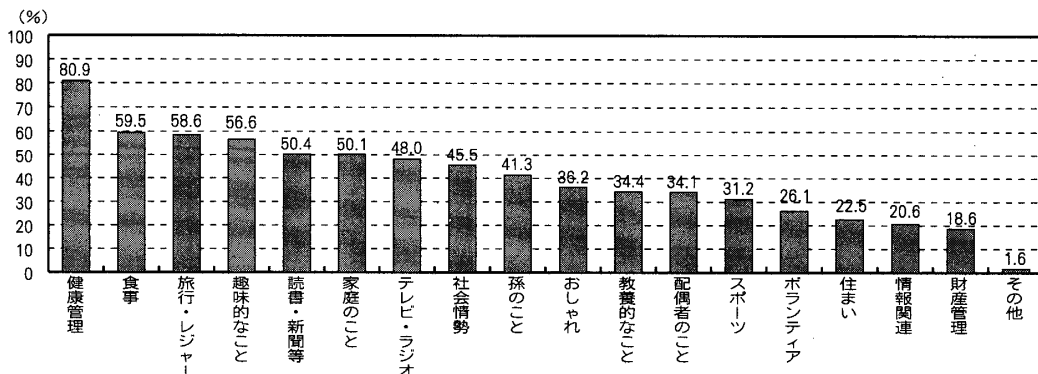


図2 現在の関心事

表5 参加している各種サークル・団体等：男女比(回答者数・男262女351)

	男		女		総計
	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	
町内会・自治会	155(59.2)	174(49.6)	329(53.7)		
老人会(クラブ)	107(40.8)	130(37.0)	237(38.7)		
教養・学習のサークル	80(30.5)	144(41.0)	224(36.5)		
健康・スポーツのサークル	80(30.5)	137(39.0)	217(35.4)		
趣味のサークル	67(25.6)	142(40.5)	209(34.1)		
OB会	134(51.1)	37(10.5)	171(27.9)		
ボランティア団体	50(19.1)	76(21.7)	126(20.6)		
婦人会の団体	1(0.4)	57(16.2)	58(9.5)		
経験がない	18(6.9)	20(5.7)	38(6.2)		
その他	28(10.7)	12(3.4)	40(6.5)		

(2) 生涯学習

趣味的、教養的な生涯学習への参加経験は86.1%であり、9割近い高齢者が経験をしていた(表6)。自発的に学習に参加し、学ぶ事への楽しさから更に自分を高めようとする意欲がみられた。したがって、自己実現と社会への参加というふたつの点で展望が見出されよう。また、それを機会に人との交流にも広がりを見せ、交流の輪がもたらす効果も感じとれた。それが生きる意義として、自身の生きがいにつながれば、このような自発的な学習効果は参加型社会を築くことにも寄与するだろう。

では、どのような参加内容かをみってみる。散歩、山歩きなどの健康・スポーツ(57.3%)、音楽や囲碁の趣味的なもの(46.8%)、料理や手芸などの家庭生活に役立つ技能(34.4%)、語学、歴史など教養的なもの(33.6%)の順であり、趣味的なもの、教養的なものが中心となっている(表7)。参加理由としては、自分の生きがいづくり(62.6%)がトップを占め、続いて「趣味を豊かにする」、「自分を向上させる」、「教養知識を高める」などであった(表8)。高齢者は、自分自身を高めるために参加をしていることが明らかとなった。また参加して良かったこととしては、「新たな友人・仲間ができた」、「楽しく充実した時間が持てた」、「人との交流ができた」の順であった(表9)。このことから、仲間ができ、その人たちとの交流が始まるのが参加をして良かった理由であり、参加者の望みでもあるようである。つまり、参加の条件として気の合う仲間と楽しく学習活動ができれば、学習の

表6 生涯学習の参加経験の有無

	人数(%)
参加経験がある	528(86.1)
ない	82(13.4)
無回答	3(0.5)
合計	613(100.0)

表7 生涯学習参加内容

	はい	いいえ
	人数(%)	人数(%)
健康・スポーツ	351(57.3)	262(42.7)
趣味的なもの	287(46.8)	326(53.2)
生活に役立つ技能	211(34.4)	402(65.6)
教養的なもの	206(33.6)	407(66.4)
情報関連	192(31.3)	421(68.7)
社会問題	110(17.9)	503(82.1)
その他	36(5.9)	577(94.1)

表8 生涯学習参加の理由

	はい	いいえ
	人数(%)	人数(%)
生きがいづくり	384(62.6)	229(37.4)
趣味を豊かにする	366(59.7)	247(40.3)
自分を向上させる	354(57.7)	259(42.3)
教養・知識を高める	281(45.8)	332(54.2)
広報・チラシ	113(18.4)	500(81.6)
テレビ・ラジオ	97(15.8)	516(84.2)
ボランティア活動	77(12.6)	536(87.4)
家族や知人に勧められ	65(10.6)	548(89.4)
専門知識を身に	43(7.0)	570(93.0)
何となく	20(3.3)	593(96.7)
資格取得のため	18(2.9)	595(97.1)
仕事・転職	11(1.8)	602(98.2)
その他	13(2.1)	600(97.9)

表9 生涯学習に参加して良かったこと

	はい	いいえ
	人数(%)	人数(%)
友人・仲間ができた	420(68.5)	193(31.5)
充実した時間	359(58.6)	254(41.4)
交流ができた	345(56.3)	268(43.7)
生きがいになった	310(50.6)	303(49.4)
教養・知識が身についた	273(44.5)	340(55.5)
視野が広がった	261(42.6)	352(57.4)
意欲が高まった	194(31.6)	419(68.4)
役に立った	173(28.2)	440(71.8)
身体の調子よくなった	153(25.0)	460(75.0)
おしゃれになった	99(16.2)	514(83.8)
家族に喜ばれた	82(13.4)	531(86.6)
資格取得ができた	31(5.1)	582(94.9)
その他	0(0.0)	613(100.0)

向上や意欲を、よりアップする源ともなると言える。学習への参加方法、内容との関連性、学習の深まりなどは次報で述べる。

生涯学習に参加しない理由としては、「仕事が忙しい」(4.4%)、「体力に自信がない」

(3.3%)、「今のままで充分」(2.4%)が上位を占めた(表10)。いかにして多くの高齢者を参加させるかは今後の課題である。また参加していない高齢者が今後参加できそうな分野は、健康・スポーツ(4.9%)、趣味的なもの(1.6%)、情報関連(1.6%)、家庭生活に役立つ技能(1.6%)などであった。高齢者の参加を促すにはこれらの分野、内容からの考察が必要だろう(表11)。

表10 生涯学習に不参加の理由

	はい	いいえ
	人数(%)	人数(%)
仕事が忙しい	27(4.4)	586(95.6)
体力に自信がない	20(3.3)	593(96.7)
今のままで充分	15(2.4)	598(97.6)
面倒	13(2.1)	600(97.9)
一緒に参加	12(2.0)	601(98.0)
きっかけがない	12(2.0)	601(98.0)
時間が合わない	12(2.0)	601(98.0)
特にない	12(2.0)	601(98.0)
興味がない	11(1.8)	602(98.2)
交通の便が悪い	5(0.8)	608(99.2)
経費がかかる	3(0.5)	610(99.5)
閉鎖的で	3(0.5)	610(99.5)
家族が反対	0(0.0)	613(100.0)
その他	6(1.0)	607(99.0)

表11 不参加者が今後参加したい内容

	はい	いいえ
	人数(%)	人数(%)
健康・スポーツ	30(4.9)	583(95.1)
趣味的なもの	10(1.6)	603(98.4)
情報関連	10(1.6)	603(98.4)
生活に役立つ技能	10(1.6)	603(98.4)
教養的なもの	8(1.3)	605(98.7)
社会問題	2(0.3)	611(99.7)
その他	7(1.1)	606(98.9)

(3) 社会参加

ボランティア活動等の社会参加の経験者は56.8%であり、半数以上が参加の経験があった(表12)。その際の感想を聞いたところ、「参加してよかった」(40.5%)、「また参加したい」(11.1%)が多くあり、「もう参加したくない」(1.5%)は少なかった(表13)。このように、経験者の多くがなんらかの形で参加を希望していることから、継続して社会参加をする意志が強いことが察せられた。自分を取り巻く「社会」にどうかかわるか、あるいは共通の関心をもった人々がどのように出会い、協力するか否かで、社会へのかかわり

方に重要性を帯びてくると同時に、それが自分の生き方とどう関わってくるかで本質的な意味をもってくるとも言える。そこで、参加活動に大きな意味を持つ内容やきっかけをみてみる。

社会参加活動には他者のための活動の「社会奉仕活動」と自己を含む社会のための「社会参加活動」があるが、ここでは社会奉仕活動、ボランティア活動、社会参加活動などをすべて「社会参加活動」に含め設問した。その結果、活動内容は、「お宮やお寺の奉仕活動」、「社会福祉活動」、「伝統的な行事や祭り」、「清掃ボランティア」、「資源リサイクル」の順であった(表14)。自発的な参加ではあるものの、やはり町内会・自治会など地域での活動が色濃いようである。参加者の男女・年齢でみてみる。男性は70~74歳が38.3%、女性は65~69歳が56.2%と参加率が高かったことから、男性は女性に比べ参加する年齢が遅いことがわかる(表15)。参加する際のきっかけは、「自分の生きがいづくりのため」、「人の役に立ちたいから」、「多くの人と交流ができるから」であった(表16)。自分自身のため、

表12 社会参加の有無

	人数(%)
社会参加がある	348(56.8)
ない	253(41.3)
無回答	12(2.0)
合計	613(100.0)

表13 社会参加をした感想

	はい	いいえ
	人数(%)	人数(%)
参加してよかった	248(40.5)	365(59.5)
また参加したい	68(11.1)	545(88.9)
もう参加しない	9(1.5)	604(98.5)

表14 社会参加をした内容

	はい	いいえ
	人数(%)	人数(%)
お宮やお寺の奉仕活動	158(25.8)	455(74.2)
社会福祉活動	153(25.0)	460(75.0)
伝統的な行事や祭り	148(24.1)	465(75.9)
清掃ボランティア	147(24.0)	466(76.0)
資源リサイクル	110(17.9)	503(82.1)
防災・災害・救助活動	101(16.5)	512(83.5)
交通安全活動	98(16.0)	515(84.0)
募金活動	61(10.0)	552(90.0)
国際交流に関する活動	42(6.9)	571(93.1)
その他	26(4.2)	587(95.8)

人の役に立ちたいが上位を占めたことから、人との交流を望み、自ら積極的に取り組みたいという気持ちがあらわれていたといえよう。また、社会参加活動の多くは、人のためというより自分のため、自分がより豊かになるためのステップアップでもあることから、他者との出会い、活動を通して互いの意識を認め合う契機が参加活動の意義を見出すことにもなる。参加活動の今後の継続意志については、「元気ならいつまでも」が31.3%と圧倒的に上位を占め、健康に大きく左右されたことがわかった(表17)。

次に、社会参加活動の経験のない高齢者に、

表15 社会参加の有無(男女別)

年齢(男)	ある	ない	無回答
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
65~69	57(37.0)	40(38.5)	1(25.0)
70~74	59(38.3)	38(36.5)	1(25.0)
75~79	29(18.8)	18(17.3)	2(50.0)
80~84	8(5.2)	5(4.8)	0(0.0)
85~89	1(0.6)	1(1.0)	0(0.0)
90~94	0(0.0)	2(1.9)	0(0.0)
95~99	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
計	154(100.0)	104(100.0)	4(100.0)

年齢(女)	ある	ない	無回答
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
65~69	109(56.2)	63(42.3)	4(50.0)
70~74	53(27.3)	46(30.9)	1(12.5)
75~79	19(9.8)	19(12.8)	2(25.0)
80~84	8(4.1)	12(8.1)	1(12.5)
85~89	2(1.0)	6(4.0)	0(0.0)
90~94	1(0.5)	2(1.3)	0(0.0)
95~99	2(1.0)	1(0.7)	0(0.0)
計	194(100.0)	149(100.0)	8(100.0)

表16 社会参加のきっかけ

	はい	いいえ
	人数(%)	人数(%)
自分の生きがいづくりのため	195(31.8)	418(68.2)
人の役に立ちたいから	179(29.2)	434(70.8)
多くの人と交流ができるから	174(28.4)	439(71.6)
自分を豊かにするため	162(26.4)	451(73.6)
自分の健康維持のため	119(19.4)	494(80.6)
地域の人の参加を見て	71(11.6)	542(88.4)
家族や知人に勧められて	64(10.4)	549(89.6)
特技を生かせるから	52(8.5)	561(91.5)
広報・チラシを見て	47(7.7)	566(92.3)
暇だから	30(4.9)	583(95.1)
外出ができるから	26(4.2)	587(95.8)
なんとなく	15(2.4)	598(97.6)
海外では当たり前だから	8(1.3)	605(98.7)
その他	10(1.6)	603(98.4)

その理由をたずねたところ、「体力に自信がない」、「きっかけがつかめれば」、の順であった(表18)。参加することそのものに躊躇し、消極的であることが窺える。「一緒に参加する人があれば」、あるいは「誘ってくれさえすれば」との思いが強く、きっかけさえつかめれば積極的な参加が期待でき、さらに参加の意義も見出せるであろう。更に、今後の参加活動の意志があるかどうかを尋ねたところ、「参加意志がある」(14.5%)、「わからない」(12.2%)、「ない」(11.6%)であった(表19)。「健康であれば」、「自分にできることがあれば」、「人の役に立てれば」、「生きがいを感じれば」などの条件が参加を決めた(表20)。高齢者の間でも社会参加活動がますます盛んになってきている近年、このような条件が整っ

表17 今後の社会参加の継続意志

	はい	いいえ
	人数(%)	人数(%)
元気ならいつまでも	192(31.3)	421(68.7)
5年ぐらい	46(7.5)	567(92.5)
わからない	24(3.9)	589(96.1)
10年ぐらい	20(3.3)	593(96.7)
1~2年	19(3.1)	594(96.9)
もうやめたい	7(1.1)	606(98.9)
10年以上	4(0.7)	609(99.3)
その他	7(1.1)	606(98.9)

表18 社会参加しない理由

	はい	いいえ
	人数(%)	人数(%)
体力に自信がない	73(11.9)	540(88.1)
きっかけがない	62(10.1)	551(89.9)
仕事が忙しい	44(7.2)	569(92.8)
一緒に参加する人がいない	42(6.9)	571(93.1)
特になし	41(6.7)	572(93.3)
今までで充分	37(6.0)	576(94.0)
時間が合わない	27(4.4)	586(95.6)
趣味がない	25(4.1)	588(95.9)
交通の便が悪い	9(1.5)	604(98.5)
閉鎖的で参加しづらい	7(1.1)	606(98.9)
面倒	4(0.7)	609(99.3)
経費がかかる	2(0.3)	611(99.7)
家族が反対する	0(0.0)	613(100.0)
その他	13(2.1)	600(97.9)

表19 今後の社会参加の意向(全数比)

	はい	いいえ
	人数(%)	人数(%)
ある	89(14.5)	524(85.5)
ない	71(11.6)	542(88.4)
わからない	75(12.2)	538(87.8)

た、活動しやすい『場』が設定されることを望みたい。

表20 今後、社会参加する条件

	はい	いいえ
	人数(%)	人数(%)
健康であれば	59(9.6)	554(90.4)
自分でできることがあれば	51(8.3)	562(91.7)
人の役に立てれば	36(5.9)	577(94.1)
生きがいを感じれば	32(5.2)	581(94.8)
時間があれば	31(5.1)	582(94.9)
近所のできれば	26(4.2)	587(95.8)
趣味が活かされれば	23(3.8)	590(96.2)
地域に貢献できれば	23(3.8)	590(96.2)
ボランティア活動が理解できる	12(2.0)	601(98.0)
退職すれば	3(0.5)	610(99.5)
その他	3(0.5)	610(99.5)

(4) モノづくりについて

菓子作り、編物、陶芸などの「手作りが好きか」との設問では、「好き」(56.1%)、「どちらでもない」(29.7%)、「嫌い」(7.0%)であり、手作りが好きな高齢者が半数以上を占めた(表21)。しかも男性(41.8%)よりも女性(73.9%)の方が手づくりを好む人が多かった(表22)。得意な分野は、「園芸・ガーデニング」(男性33.1%、女性39.1%)、「和洋裁・編物・手芸」(男性0.4%、女性58.8%)、「農作物づくり」(男性36.8%、女性23.9%)、「料理」(男性10.5%、女性36.7%)であった(表23)。手作りがよい理由としては、「趣味だから」(男43.1%、女54.5%)、「生きがいでだから」(男32.2%、女34.5%)、「あたたかみがあるから」(男14.6%、女39.7%)というように自分のための手作りであることがうかがえた(表24)。

高齢者はその昔、今のように買いさえすれば手に入る時代ではなく、素材や材料を駆使し、必要なものや自分の欲しいモノを作ってきた。このような物のない時代にモノづくりは貴重であったはずである。モノづくりのできることが自慢でもあり生活の糧にさえしてきた。そんなモノづくりの技や技術は今もなお、自分の生きる支えであり自慢でもある。昔とった杵柄ではないが、生活の一部でもあるモノづくりがないとやはり落ち着かないということもある。そんな高齢者にとってモノ

づくりは唯一の楽しみでもあり、生きがいでもあるはずである。勿論新たに始めた人もあるからすべてにあてはまるはずはないことはいうまでもないが、この時代を生き抜いた高齢者のモノづくりへのバイタリティや迫力は結果にあらわれている。このように「モノをつくる」「生産をする」という行為は高齢期の生き方のなかで高い位置を占めている。モノづくりを営むには健康で活動的でなければならず、それを保持しながら意欲的に取り組むことが必要である。それがモノづくりへのバイタリティであり、源でもある。また、出来上がったものへの達成感や満足感、ある

表21 モノづくりへの感想

	はい	いいえ
	人数(%)	人数(%)
好き	344(56.1)	269(43.9)
どちらでもない	182(29.7)	431(70.3)
嫌い	43(7.0)	570(93.0)

P値 判定
0.0000 **

表22 モノづくりへの感想：男女比

	男	女	計
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
好き	100(41.8)	244(73.9)	344(60.5)
どちらでもない	113(47.3)	69(20.9)	182(32.0)
嫌い	26(10.9)	17(5.2)	43(7.6)
合計	239(100.0)	330(100.0)	569(100.0)

P値 判定
0.0000 **

表23 あなたが得意とするモノ作り〔回答者数・男239女330〕

	男	女	計
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
園芸・ガーデニング	79(33.1)	129(39.1)	208(36.6)
和洋裁・編物・手芸	1(0.4)	194(58.8)	195(34.3)
農作物づくり	88(36.8)	79(23.9)	167(29.3)
料理	25(10.5)	121(36.7)	146(25.7)
日曜大工での物づくり	83(34.7)	11(3.3)	94(16.5)
陶芸	16(6.7)	19(5.8)	35(6.2)
その他	19(7.9)	11(3.3)	30(5.3)

表24 モノ作りの理由〔回答者数・男239女330〕

	男	女	計
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
趣味だから	103(43.1)	180(54.5)	283(49.7)
生きがいでだから	77(32.2)	114(34.5)	191(33.6)
あたたかみがあるから	35(14.6)	131(39.7)	166(29.2)
とにかく手作りが好きだから	46(19.2)	109(33.0)	155(27.2)
経済的だから	33(13.8)	88(26.7)	121(21.3)
安全性が高いから	25(10.5)	67(20.3)	92(16.2)
個性的だから	22(9.2)	44(13.3)	66(11.6)

いは人から称えられるうれしさも見逃せない。

そこで、このバイタリティを「教える」という形で指導に生かすことはできないのかと次の設問をした。つまり、他者の指導への意識を尋ねたのである。その結果、「教えたい」(43.6%)、「教えたくない」(56.4%)と「教える」ことに関しては、意外に消極的であることがわかった(表25)。更に、どんな人を対象に教えたいかとたずねてみたところ、全ての年代(33.0%)、小学生(24.7%)、福祉施設入居者(19.9%)、中高年(19.1%)、老年(19.1%)の順であった(表26)。積極的な高齢者は全ての年代に指導が可能と推察できるが、子供やお年寄りを対象としたい高齢者も多い。これは教えたい対象者も高齢者(指導者)の好みによるところが大きいと考えられる。若者はどうも敬遠されがちのようである。

また、教えたくない理由を尋ねてみると、「未熟だから」(52.5%)、「歳だから」(27.2%)、「暇がないから」(14.6%)の順で意外と自信のない回答であった(表27)。このうちの暇がない人は時間さえあれば教えられることを示唆しているが、「未熟だから」、「歳だから」という理由の人は自分のモノづくりが生かせると感じれば、あるいは人に頼られていると感じさえすれば教えられると考えてよいだろう。そして教えることができる条件としては、「健康であれば」(26.9%)、「自分のモノづくりが生かせると感じた時」(17.9%)、「人から頼られていると感じる時」(16.6%)の順であった(表28)。これは、教えられる条件として「健康であれば」と、健康が気にかかるのは当然だが、その次の「自分のモノづくりが生かせると感じた時」、「人から頼られていると感じる時」などの内容からは、教えてもいいとの気持ちが窺える。このことから高齢者は、思いのほか引っ込み思案であることがわかった。引っ込み思案の高齢者をどうすれば指導する立場にたたせられるか、あるいはどうすれば自信がつくかなどが、今後の課題である。

そこで高齢者の指導・教授について考えて

みる。この「教える」、「教わる」ということは高齢者が人に教えたり、人が高齢者から教わったりすることである。高齢者の指導力でモノづくりが伝授され、その『場』を通して仲間が増えれば、とてもいい交流が生まれる

表25 モノづくりの指導・教授

	男	女	計
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
教えたい	95(42.4)	138(44.5)	233(43.6)
教えたくない	129(57.6)	172(55.5)	301(56.4)
合計	224(100.0)	310(100.0)	534(100.0)

表26 教えたい対象者〔回答者数・男95女172〕

	男	女	計
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
すべての年代	39(41.1)	49(28.5)	88(33.0)
小学生	31(32.6)	35(20.3)	66(24.7)
老人・福祉施設入居者	14(14.7)	39(22.7)	53(19.9)
中高年	24(25.3)	27(15.7)	51(19.1)
老年	24(25.3)	27(15.7)	51(19.1)
子育て中の人	0(0.0)	23(13.4)	23(8.6)
中・高・大生	13(13.7)	7(4.1)	20(7.5)
大学生以上の若者	7(7.4)	9(5.2)	16(6.0)
乳幼児	3(3.2)	10(5.8)	13(4.9)

表27 教えたくない理由〔回答者数・男129女172〕

	男	女	計
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
未熟だから	77(59.7)	81(47.1)	158(52.5)
歳だから	34(26.4)	48(27.9)	82(27.2)
暇がない	19(14.7)	25(14.5)	44(14.6)
身体の具合が悪い	8(6.2)	30(17.4)	38(12.6)
面倒	17(13.2)	12(7.0)	29(9.6)
その他	14(10.9)	10(5.8)	24(8.0)
恥ずかしい	7(5.4)	13(7.6)	20(6.6)
役立ちたいと思わない	5(3.9)	8(4.7)	13(4.3)
人と接することが嫌い	3(2.3)	3(1.7)	6(2.0)

表28 教えられる条件〔回答者数・男129女172〕

	男	女	計
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
健康であれば	28(21.7)	53(30.8)	81(26.9)
物づくりが活かせると感じる時	23(17.8)	31(18.0)	54(17.9)
時間があれば	21(16.3)	29(16.9)	50(16.6)
人から頼られていると感じる時	27(20.9)	23(13.4)	50(16.6)
生きがいを感じる時	23(17.8)	22(12.8)	45(15.0)
人と交流ができる時	22(17.1)	19(11.0)	41(13.6)
その他	14(10.9)	18(10.5)	32(10.6)
地域に貢献できる時	19(14.7)	8(4.7)	27(9.0)
他の人と一緒に教える時	7(5.4)	14(8.1)	21(7.0)
教える場所が近い時	9(7.0)	6(3.5)	15(5.0)
老人・施設で教える時	5(3.9)	4(2.3)	9(3.0)
退職すれば	2(1.6)	1(0.6)	3(1.0)
お金がもらえる時	1(0.8)	1(0.6)	2(0.7)
送迎をしてもらえる時	1(0.8)	0(0.0)	1(0.3)
学校で教える時	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)

と考える。もちろん、高齢者自身も指導者としての高齢者の充足感や満足感にもなる。そしてそれが高齢者自身の生き方にさえ影響をおよぼす。したがって指導・教授をすることが人の「役に立つ」、人に「頼られている」という条件を満たすことにもなり、同時に引込み思案の高齢者の「きっかけ」をも作ることになるだろう。

このように高齢者が指導・教授することは、高齢者の『力』を他者に活用するのみならず、自身の生きがいづくりにもなるはずである。そしてその『場』の提供が交流の『場』となり、ひいては共生社会への架け橋にも成り得ると考える。

対象者を若者に焦点をあてた結果は次報で述べる。

(5) まとめ

本研究の高齢者の意識調査から得られた結果をまとめてみる。

現況

- ・ 高齢者は健康を第一と考えている。
- ・ 元気で活動的な高齢者が多い。
- ・ 地域への愛着や近所づきあいは大切と思っている高齢者が多い。
- ・ 生涯学習は積極的に取り組んでいる。
- ・ 活動のための目的意識がはっきりしている。
- ・ 社会参加活動には意欲的である。
- ・ 多くの人との交流を望んでいる。
- ・ 手づくり志向の高い高齢者は指導・教授の意識が強い。
- ・ 高齢者はモノづくりが得意である。

今後の取り組み

- ・ 社会参加できない理由の多くは「体力に自信がない」、「きっかけがない」であるため、いかに参加をさせるかを考える必要がある。
- ・ これらの活動の多くは、参加するに留まり、さらなる向上に向けて試みをする高齢者が少なく、どうすれば参加に留まることなく向上意欲につながられるかが問

題である。

- ・ 学習、社会活動の経験者でも指導・教授には消極的であるため、高齢者の指導・教授に対して自信を持たせ活用の『場』をつくる必要がある。
- ・ 自分の得意なモノづくりを他者に教える高齢者は少ないため、教えるきっかけ、方法を見出す必要がある。
- ・ 指導・教授の消極的な理由は「未熟である」、「歳である」がもっとも多いため、引込み思案をなくす対策が必要である。

以上のことから、高齢者の持っている豊富な「経験」、あるいは「モノづくり」の技能や知識といった『力』を広く引き出す方策が望まれる。「モノづくりが生かせる」、「頼られている」と感じる時を契機に、「未熟だから」、「歳だから」という消極的な思いを捨て、蓄えた『力』を多くの人に伝達・伝授できるよう、「指導・教授」のための環境整備が重要となる。

これらの結果をもとに高齢者の生きがいづくりへの方策を表すと図3のような構造となり、高齢者自身の活動が、自己の向上へ、もうひとつは、他者との交流に結びつく。そこで自己の向上とは、学習やモノづくりは積み重ねるほどに成果が上がり目標が達せられる。その成果が励みとなり、以前にも増してさらに懸命に励む。というように目標が目標を生み、向上心を掻きたて自分をも成長させる。その学習成果が発表であり展示であったりすれば向上意欲もわく。これが自己の向上であると考えられる。

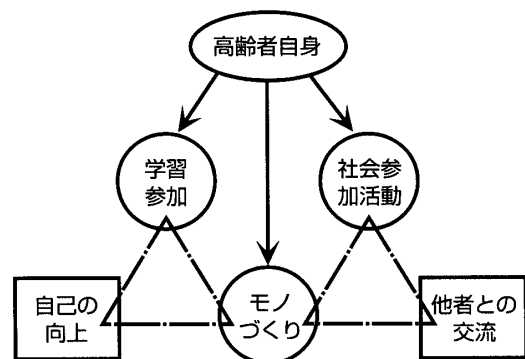


図3 生きがいづくりへの構造

一方、他者との交流では、社会参加活動での自身の力を他者に役立たせることが、存在価値を高め、自分が頼られていることを認識する。またモノづくりも同様に、自分の手づくりを他者に伝授したり、指導することで活用が促される。つまり、他者や社会のために自分が生かされることで満足や喜び、さらには感謝さえされるはずである。それが、人とのふれあいとなり、交流が生まれる。これが自分を生かす他者との交流であると考え。

このように学習とモノづくりは、成果を目標とする向上を目指し、社会参加とモノづくりは人や社会とのふれあい、つまり、交流を目指すことで高齢者の生きがいづくりになる。長年培ってきた自分の能力や知識、特技や技術がまわりの人びとや社会から認められ、称えられたりすることで「努力してよかった」、「生きてきてよかった」と感じる。それが生きがいにつながる。よってこのような形態が今後の高齢者の望ましい姿であると考え。

IV. おわりに

高齢者の意識調査から高齢者の生活基盤、生涯学習、社会参加活動、モノづくりなどを通して現状を把握した。その結果、高齢者は学習・社会参加・モノづくりを指導・教授できる指導者としての担い手に成り得ることが明らかとなった。指導者として、高齢者の『力』を100%発揮できることが大切である。そして、その『力』を発揮できることを望んでいることもわかった。高齢者は参加するのみならず、指導・教授の契機がつかめれば自己表現から自己実現への移行が可能であるということがわかった。自己表現とは、自分が学習したことを外部に発表しようとするのであり、自己実現とは発表などの表現にとどまらず、指導できるまでに自分を高めることをいう。しかし、その『力』をどう活用し、どう発揮するか、あるいは誰にどこでどんな方法で行うかなど多くの課題を残したままであり、そのための解決策を見出さねばならな

い。

また、それらの『力』を発揮する『場』が必要となる。そこで、次の研究段階として、高齢者の「モノづくりを生かす」対象に、あるいは「頼られている」と感じる相手として、若者を取りあげる。若者の高齢者に対する意識を調査し、その結果をもとに若者の思いや考え方を探る。それこそが、世代間の交流を活発にし、高齢者が積極的に取り組めれば、世代間交流の盛んな社会を築くことになる。つまり、高齢社会をよりよい共生社会へと導く方策が展開できるものと確信する。

参考文献

- ・生きがいある長寿社会、学びあう生涯学習
1999年 ミネルヴァ書房
香川正弘他共著
- ・ボランティアの理論と実践
1997年 中央法規出版
編著 巡 静一他
社福 大阪ボランティア協会
- ・生涯学習と社会参加
2000年 東京大学出版会
佐藤一子著
- ・高齢者のライフスタイル
1999年 早稲田大学出版部
嵯峨座晴夫著
- ・生涯学習活動の支援
平成9年 (財)全日本社会教育連合会
岡本包治著
- ・生きがいの創造
1979年 日常出版
日高幸男他共著
- ・よくわかる社会調査の実践
1991年 ミネルヴァ書房
井上文夫他共著
- ・実践心理データ解析
1999年 新曜社
田中 敏著
- ・高齢者の社会参加と生きがいに関する研究
2002年 東海女子短期大学紀要第28号
高間由美子・杉原利治